**「魔術学園」製作秘話**

 作：執行部長

我々がラガドーン・タバーンでこの「魔術学園」を製作するまでに様々なことが起こった。今からそれらの一部を記そうと思う。この内容はとても信じられるものではないが（いまだに私も信じられない）、すべて事実である。

**発端**

「魔術学園」を製作する理由となったのはラガドーン・タバーン会長の谷口が魔法や魔術にこだわったからだ。彼は普段あまり自己主張するような人ではないため、私を含め周りは珍しいと思いつつも、否定する理由もないので彼の言うとおりに、魔法を扱ったゲームを作ることになった。

後日、彼にあれほど魔法にこだわった理由を聞いてみた。その理由はなんと彼は本物の魔法使いだったからというものだった。このことを打ち明けられた我々は、魔法などあるわけないと信じ込んでいたため、かなり困惑した。普段から真面目な男が真顔で魔法が使えると言い出したので、どうしようかと思った。

しかし唖然とする我々を無視するかのように、彼は鞄から宝石のようなものを取り出した。そして何か呪文をつぶやくとその石が急に光だした。彼は他にも魔法を使えば様々なことができると説明してくれたが、本物の魔法の片鱗を見せつけられた我々は言葉が出せなかった。

**製作**

会長は彼の知る魔法のルールを教えてくれた。魔力は「魔法石」と呼ばれる宝石に宿ることや、魔法石３つを儀式にかけることで魔法石が変化することといった「魔術学園」に必要なことは教えてくれた。しかし肝心の儀式の手順や、どうやって魔法石を作り出すかといったことは教えてくれなかった。私は密かに魔法を扱ってみようと思っていたので大変残念に思った。

そんなことを思いつつ、我々は「魔術学園」を作っていった。時折、彼の話してくれる彼の通っていた魔術学園の思い出や、現代における魔法の使われている場所の話を聞いた。彼の話を聞き魔法を使ってみたいという気持ちは、ますます強くなった。

**事故**

だが私よりも強く魔法を使ってみたいと思っていた者がいた。総務の鈴木だ。彼はうまく会長から魔法石の作り方を聞きだし、工事中の学生会館のトイレで水の魔法石を使って様々な実験を繰り返したそうだ。どうやって魔力を強くするかが分からず、色々なことをしていたらしい。

そしていつしか本物の水を作り出すことに成功した。しかし今度は魔力が強すぎて、水の量を制御できずにトイレのパイプを一部壊したそうだ。おかげでトイレ工事は長引いたものの、原因は不明のまま処理されたため事なきを得た。もちろん、会長からこっぴどく叱られていたが。

この魔術学園を作るにあたって本当に様々なことが起こった。一部を実際に見た私ですら信じられないのだから、当然だれも信じてはくれないだろう。だが実際に見た以上、このことを簡単に忘れられそうにない。いつか彼以外の魔法使いが魔法を使っているところを見てみたいものだ。

この作品はフィクションです。登場する人物・団体は実在の人物・団体とは一切関係ありません。